

解説



編集委員会座談会

品質工学の継承と普及 (1)

Transfer and Spread of Robust Quality Engineering (1)

出席者：明吉秀樹 (明吉事務所)，植 英規 (福島工業高等専門学校)，坂本雅基 (花王 (株))，高橋和仁 (神奈川県立産業技術研究所)，近岡 淳 (近岡技術経営研究所)，細井光夫 ((株)小松製作所)，見原文雄 (元コニカミノルタ (株))，矢野耕也 (日本大学)，山村英記 ((株)東海理化)，山本桂一郎 (富山高等専門学校)，吉原 均 (キヤノン (株))

坂本 (司会) 今までの出版部会座談会において、2018年「学会誌の意義と課題」、2019年「品質工学」誌の価値を高めるため、2020年「地方研究会、部会・委員会、専門分野、他学会とのつながりをどのように深めていくか」、2021年「IT化の進展と品質工学誌」のこれから」というテーマで議論してきた。去年2021年の座談会の最後のところで、30周年に向けてやりたいこと、品質工学の継承に関する問題が議論されており、今回2022年は30周年ということで「品質工学の継承・普及について」というテーマで議論したい。

「継承」について調べてみたところ、ちょうど技術継承の記事¹⁾を見つけた。技術継承においては「受け取る側が学ぶ気持ちになること」が大前提であり、「面白いと思わないと伝わらない」、「必要に迫られないと伝わらない」、「利益がないと伝わらない」のはもっともだと思った。そのうちの一つでも当てはまれば技術継承が可能であり、どれが良いかはケース・バイ・ケースなので、技術継承のためにはとりあえず全部用意しろという主張であった。品質工学の継承に置き換えると、「品質工学を面白いと思う」、「品質工学の必要に迫られる」、あるいは「品質工学のメリットを感じる」ということに気を配る必要があると思う。

これまでと今後では環境・前提条件が違うので、われわれの経験をそのまま今後に生かすことはできないかもしれないが、議論の前半では各位の経験を聞かせていただき、後半では環境の違いも考慮した

「品質工学の継承・普及」の対策および学会誌の意義について議論を深めたい。この座談会に参加されている各位は品質工学にひかれて今も品質工学を続けている方々なので、それぞれに前向きな経験があることと思う。まずは、自分の経験から話して、口火を切りたい。

自分の場合は、必要に迫られたことがきっかけである。生産技術の仕事である商品の生産を立ち上げようとしたときに収率が上がらず困って、いろいろな雑誌や本を読んだところ、たまたま会社に矢野宏先生の本『おはなし品質工学』があって「使えるかもしれない」と思ったことがある。その時は使う前に事業が消えて使えなかったが、その次のテーマで同じように困ったときに思い出して、使ってみたら大きな改善効果が得られ、面白いと思い、メリットを感じた。そのときは、和歌山に何か月も長期出張になっていて「テーマが片づくまで帰ってくるな」と言われていた。子供が生まれたばかりで早く帰りたいくて、何とかしたいと思ったときに品質工学を思い出し、うまく改善できたという経験をしたのがきっかけである。

矢野 就職してから、配属先である生産技術部門という業務形態上の必要に迫られた。生産技術自体が何でも屋さんのようなところがあり、大学を卒業したばかりでは幅広い仕事ができるレベルにない。担当がたまたま工場の装置産業だったので、スケールが大きくてかつパラメータが多く、実験が大変であり、効率よく、早く、難しい装置を立ち上げる必要